「発想法」

著者：川喜田二郎　出版社：中公新書

価格：693円



新聞の見出しを毎日賑わすのは企業の業績悪化と人員削減の話題である。アメリカの金融危機に端を発した日本の金融危機とそれに伴う景気の後退は、世界経済の構造的問題を浮き彫りにしている。教育をもって世の中に貢献するという使命を持った私たち教員はそのような中で主体的に創造力をもって問題を解決できる人づくりをおこなうことが何よりもの喜びである。そのための指導法を身に付けるうえで川喜田二郎先生の「発想法」は必読書であろう。

人の創造力はアイデアという姿で現れる。アイデアは既存の情報と情報の関わりの中で誕生する。そのプロセスを体系化した「ＫＪ法」をその発案者自身が詳細に説明してくれるのが「発想法」である。文化人類学者である著者の体験から科学を書斎科学、実験科学、野外科学に分類し、実際の現場である野外から情報を収集し研究するフィールドワークから生まれた「ＫＪ法」はアントレプレナー関連のテキストで収束思考の手法として頻繁に登場するが、収束思考と発散思考が連続してまたは並行して行われる思考法である。ブレインストーミング等で収集した無数の情報カードを束にしていく作業は大を中にしていくという意味では収束であるが、収束したカードに一行見出しを記述したり、一行見出し同士の関わりを見つけ出す際の思考は発散である。著書ではその過程における思考方が詳細に論じられている。また、一行見出しのつけられた情報カード群をＡ型図解にする際に「空間的に並べる」という表現があるが、空間は三次元であるのに対して並べる場所はの二次元の座標上である。私は空間を作るための三次元目の

座標は参加者の思考のなかにあり、それこそがＫＪ法による発想のエネルギーだと考える。つまりＡ型図解化は情報と情報のつながりを探しながら新たな情報を創造していくための方法なのである。混沌とした情報同士では関わりのなかった情報が意外な方向で繋がりだした時にアイデアが生まれるのである。著書では、Ａ型図解をさらにＢ型文章につなげる方法を説明している。私は発案者である川喜田二郎先生の書籍を読むまでＫＪ法はＡ型図解を行い、混沌とした情報を整理する方法だと思っていたが、Ｂ型文章を表現することでＡ型図解の空間的配置を行った参加者の三次元目の思考が言葉となって現れてくるのである。Ａ型図解によってなんとなく理解できた情報と情報のつながりをＢ型文章によってはっきりとしたアイデアにするのである。そのため著書では「叙述と解釈をハッキリ区別せよ」と書かれている。また、「言葉は大切に良心的に使わねばならない」とも書かれている。混沌とした情報はＫＪ法によって新しいアイデアにつながるのである。

川喜田二郎先生は中学時代から山歩きに没頭されたそうである。そのご経験も野外科学による発想法に繋がったのであろう。無数の踏みしめた落ち葉や喘いで乗り越えた岩場、稜線に出た時の爽快感。現場でしか収集できない情報である。

京都府立京都すばる高等学校　商業科　貴島良介